いのはな Harmony ハーモニー 41 2015.4
千葉大学病院ニュース　人間の尊厳と医療の調和をめざして

多彩なプログラムで医療人を育成

患者さんに自信を持って向き合えるように、と先輩医師の指導を受ける初期研修医

安心・安全な医療を提供するために技術と知識の向上に努めています

当院には、700名を超える医師がいます。そこに毎年、春になると医学部を卒業した初期研修医が2年間の研修を行うためにやってきます。今年も46名が医師としての第一歩を当院で踏み出しました。

ところで皆さんは、医師がどのように育てられているか、ご存じですか。

医学部を6年間で卒業し、医師免許を取得できたら「ゴール」……ではありません。その後、2年間は初期研修医として実際に医療機関で働き、患者さんの治療に携わりながら、先輩医師の指導のもと、医療人に求められる知識や技術を修得します。

その後、自分がどの診療科の専門医になりたいかを決めてから、さらに深く、数年間、専門分野での経験を重ねていくのです。

指導する医師とともに笑顔を見せる研修医たち

当院では、目の前の患者さんを治すことはもちろんですが、10年後、20年後の患者さんのために活躍できる医療人を育てることも大切な使命と考え、院内に総合医療教育研修センターを設置。

医師として必要な知識・技術・人格など基本的な面はもちろん、大学病院ならではの難易度の高い知識・技術を身につける研修も行い、専門性を高める教育を実施しています。

また、医療技術の向上だけではなく、コミュニケーション能力の教育にも力を入れています。患者さんに診断結果や治療方法を丁寧にわかりやすく伝えられるよう、実際に模擬患者との会話や対応のようすを録画して、留意点を確認するシミュレーション教育も行っています。

こうした人材育成を進めるために、当院では「指導医」という資格を持った医師を豊富にそろえて、毎日、身近なところで指導にあたっています。

同時に、主要な診療科には教育専任の医師（アテンディング）18人を配置。この医師たちが毎月集まり、診療科の垣根なく、良い教育を提供するためのディスカッションを行っています。

さらに、研修医が看護師やスタッフとしっかりコミュニケーションをとってチーム医療を実現できるかどうかを、看護師がチェック。その評価をもとに教育を強化しています。

これからも、医療をリードしていく優れた医師の育成に、病院全体で取り組んでまいります。

コミュニケーションの大切さを実感

初期研修医（2年目）
和田雄樹

昨年の4月から千葉大学病院で初期研修（臨床研修）を受け始めて1年がたちました。患者さんへの処置が的確に判断できるようになってきたと思います。

この1年間で研修医として実感したのは、「コミュニケーションの重要さ」です。看護師やスタッフとのチーム医療でも不可欠ですし、患者さんに伝わるように説明するためにもコミュニケーション能力の向上が求められます。

残りの研修期間で、知識・技術・人間力をさらに高めて、患者さんの期待に応えられる医師になりたいと思います。

特　集

ひとりの患者さんをトータルサポート

チーム医療で取り組む「がん診療」

**日本人の2人に1人が「がん」になり、3人に1人が「がん」で亡くなる時代。
治療を受けながら働く人は、32万5千人に上ります。
当院では、複数の診療科・部門が連携する治療体制と支援のしくみを整え、
ひとりの患者さんを総合的にサポートしています。**

臨床腫瘍部
部長
滝口裕一

さまざまな病気を抱える がん患者さんに対応

千葉大学病院では、がんの診療を受ける患者さんが年々増えています（図表①参照）。日本全体でも高齢化を背景にがん患者さんは年々増加し、半数が75歳以上となっています。

高齢になればなるほど多くなるのが、高血圧や糖尿病、心疾患などさまざまな病気を持つ患者さんです（図表②参照）。調査によれば、75歳で病気を持っていない人は、わずか15%程度。大半が何らかの病気を抱えています。

そのため、高齢者がんになると、がん診療の専門家だけで治療するのが難しい場合もあり、複数の診療科・部門の専門性を活かした総合的な診療体制が求められてきます。

そこで当院では、皮膚障害を併発している場合は皮膚科が連携するなど、併発する病気により診療科や糖尿病チーム、循環器病チームといった専門の治療チームが、共同で治療にあたっています。

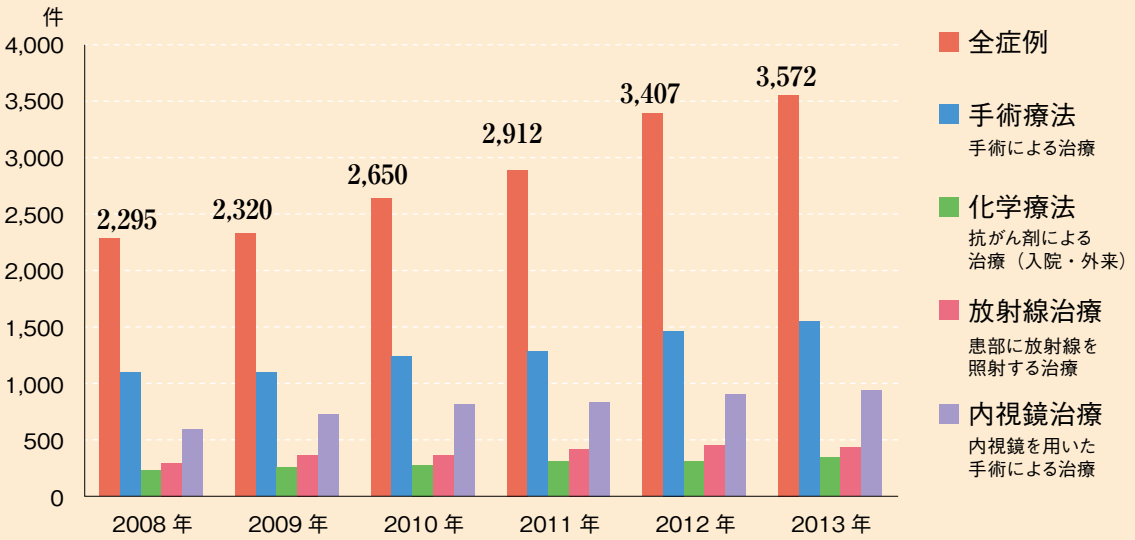
複数の専門スタッフが連携 病院全体で患者さんを支える

一方、厚生労働省の推計によれば、がんを治療しながら働く人は約32万5千人に上ります。

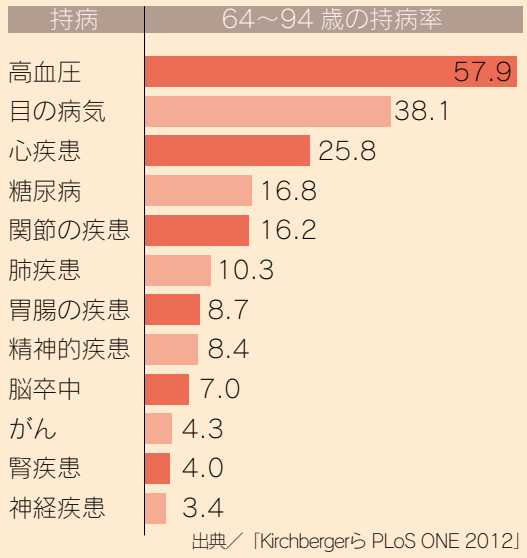
入院せず、日常生活を送りながら治療を続けられるよう、当院の外来診療棟の5階には、がんの化学療法などを外来で受けられる「通院治療室」があります。

治療件数は増え続け、年間1万4千件を超えています。これをサポートするのが中央診療部門で、例えば薬剤部では、専門の薬剤師を通院治療室に

図表①　**当院のがん患者さんは5年間で約1.6倍に**（新規診断数）



図表②　**加齢とともに持病は増える**



出典／「Kirchbergerら PLoS ONE 2012」

ニュース＆トピックス　NEWS & TOPICS

ジェフユナイテッド市原・千葉の選手が小児病棟でリフティング！　1月15日

谷澤達也選手、田代真一選手、栗山直樹選手らが「病気の子どもを励ましたい」と小児病棟を訪問しました。プロのサッカー選手ならではの見事なリフティングを披露すると、コツを学んで挑戦する子も。じゃんけんゲームやサイン会も行われ、親子みんなで交流を楽しみました。

サイン会では選手と直接ふれあうことができました

WHO局長が講演で警鐘鳴らす「地球環境の変化と人の健康」　2月9日

WHO（世界保健機関）公衆衛生・環境局のマリア・ネイラ局長が千葉大学の亥鼻キャンパスで、環境が健康に与える影響、予防医学の有用性について、100名を超える聴衆を前に時折ユーモアを交えながら講演しました。当院は今後も医療の国際化を推進してまいります。

参加者からの質問に熱心に答えるマリア・ネイラ局長

高齢の患者さんの診療支援 専門スタッフが対応しています

当院ご入院の患者さんで、多くの薬を服用している、多数の診療科にかかっているなど高齢者特有の問題に、専門医・看護師・薬剤師など多職種がチームを作り、相談に対応しています。外来診療棟には専門医の支援窓口も設置されました。　◆支援窓口：火曜日10～12時（要予約）

ご予約は高齢者医療センターまたは043-222-7171まで

お知らせ　現在行われている外来診療棟の改修工事では、ご不便をおかけしており申し訳ございません。7月21日（予定）には現在の改修場所に、患者支援センター、検査部、整形外科、遺伝子診療部、地域医療連携部、薬剤部などを配置し、より快適な外来診療を提供してまいります。

配置して、専門･認定看護師、専門医師らとともに、患者さんの主治医と密接に連携をとりながら、チームワークで診療にあたっています。

また、専門の相談員によるがん相談支援センターや、患者さん同士で不安や悩みを共有する「がんサロン」など、情報提供や精神面のサポートも行っています。

このように、患者さんが希望を持てるがん診療を病院全体で実践する――それが当院のがん診療の理念です。

患者さんやご家族の不安を少しでも軽くできるよう、私たち看護師も精一杯サポートします（通院治療室スタッフ）

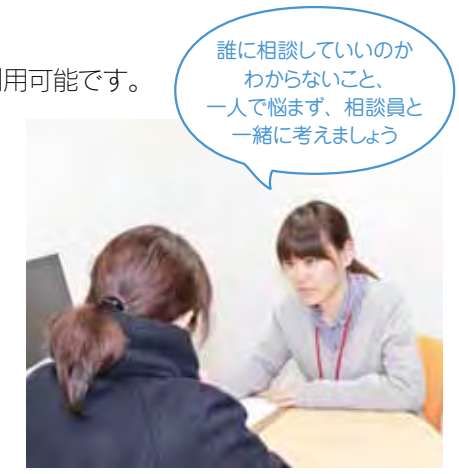
不安や悩みなどをお気軽にご相談ください

■千葉大学病院の「がん相談支援センター」

当院の患者さんではなくても、そしてご家族だけでも、ご利用可能です。

- 「医療費のことが心配……」
- 「利用できる医療福祉制度を知りたい」
- 「自宅での療養や介護が不安」

など、がん患者さんやご家族の医療と福祉に関するご相談を、専門の相談員がお受けしています。心配事や不安を一人で抱え込まず、気軽にご相談ください。



【お問い合わせ先】
がん相談支援センター（地域医療連携部内）
直通電話：043-226-2698（平日9:30～16:30）

■「がんおしゃべりサロン」に参加してみませんか

当院では、がん患者さんやご家族が、病気や治療のこと、気持ちなどについてお互い自由に話し合う場「がんおしゃべりサロン」を毎月開催しています。参加者からは「気持ちが楽になった」との感想もあり、好評です。興味のある方は、ぜひ、のぞいてみてください。

【平成27年度の開催スケジュール】

2015年	5月21日（木）	6月20日（土）
	7月16日（木）	9月17日（木）
	10月17日（土）	11月19日（木）
	12月19日（土）	

●時　間：いずれも13:30～14:30
●場　所：5、6、7月は1階 会議室1
　　9月以降は未定

お気軽にお立ち寄りください（申込不要、途中参加可）

市民公開講座を開催しました（1月25日）

「みんなで考えよう―これからのがん治療」

「膵臓がん検診の話を聞かないのはなぜ？」

「検診での早期発見が難しいためです。胃がん・肺がん・大腸がん・乳がん・子宮頸がんは検診が有効なので受診をお勧めします」

約200名が参加した当院主催の市民公開講座の質問コーナーで、医療従事者が参加者の皆さんの不安や疑問に一つひとつ答えました。当院では、地域がん診療連携拠点病院として市民公開講座を毎年開催し、今年で8回目となります。

がん患者さんの体験談では、当事者ならではの悩みや葛藤、職場の仲間の励ましが支えになったことなどが語られ、来場者の共感を誘いました。

パネルディスカッションに参加した患者会代表者と医療従事者からは「地域の病院・診療所と大学病院はそれぞれに役割があり、患者さんのために連携しているので、ご理解いただきたい」「患者さんに支援情報を伝える役割を主治医にも期待したい」などの意見が出されました。

千葉県からは、「予防、早期発見」「良質な医療提供」「相談・情報提供・生活支援」「がん対策の向上を支える研究」など、がん患者さんの増加に備え４つの施策に取り組んでいる点について説明がありました。

当院では今後も有益な公開講座を予定していますので、ぜひご参加ください。

がん患者さんが直面する課題をディスカッション

患者さんのためのQ&A

Q どうしてぎっくり腰になるのですか？

A ぎっくり腰は、急性腰痛症の俗称で、重いものを持ち上げたり、腰をひねったりするなど急な腰への負担がきっかけとなって発症します。ときに身体を動かすこともできなくなるほどの強い痛みが特徴で、欧米では“魔女の一撃”と呼ばれています。

患者さんの多くは40～50歳代ですが、20～30歳の若年層もぎっくり腰になることはあります。力仕事など、日頃から腰に負担がかかる仕事をしている人はもちろんですが、デスクワークをしている人でも発症することがあり、普通に生活していくうえでは避けられない日常的な病気です。

なぜ起こるのか、どのようにして痛みが出るのかということについては、いまだに十分にわかっていません。現状では、腰を構成している人体のパーツ、例えば椎間板や筋肉、靭帯、骨と骨との関節などにちょっとした亀裂や破綻が起こった状態と考えられています。

ぎっくり腰になったら

何も治療しなくても一週間程度で治ることがほとんどですが、痛みが強いときは湿布を貼ったり、消炎鎮痛剤を内服したり、腰椎サポーターで腰の負担を減らすことが大事です。

こんなときは要注意

発熱や、痛みがだんだん強くなったり、横になってもとれない場合や、何度もくり返すようなら、くわしい検査や定期的な治療が必要な腰痛かもしれません。がんなどの重大な病気も疑われますので、お早めに整形外科を受診してください。

整形外科　医師　藤本和輝（ふじもとかずき）

お知らせ　「千葉大学病院 がん情報サイト」では、がんおしゃべりサロンの予定や、がん相談支援センターの利用方法など、がん患者さんをサポートするさまざまな情報提供を行っています。ぜひ、ご覧ください。（千葉大学病院 がん情報サイト　http://www.ho.chiba-u.ac.jp/gan/）

スギ花粉症を根本から治したい！予防にも挑戦しています

スギ花粉の季節が終わったこのタイミングだからこそ、来年に備えて少し早めに治療を始める「舌下免疫療法」をご紹介します。花粉症ではない人を対象に、予防を目的とした臨床試験も行っています。

耳鼻咽喉・頭頸部外科 科長
おかもとよしたか
岡本美孝

1979年に秋田大学医学部卒業。2002年より現職。以前は釣りなどを楽しんでいたが、最近は忙しく仕事に追われている。

注射ではなく、舌の裏に投与する自宅で治療できる方法に

日本国内で約2,500万人が患っているスギ花粉症。その治療法には、薬で症状を和らげる対症療法と、根治が期待できる免疫療法があります。

免疫療法は、注射でアレルギーの原因物質（アレルゲン）を少しずつ体内に吸収させ、体質を改善していく療法です。保険適用が認められていますが、注射の痛みがあること、通院が大変なことが課題となっていました。

そこで、新たに昨年10月から保険適用になったのが、毎日１回スギ花粉エキスを舌の裏に投与する「舌下免疫療法」です。自宅でできるので、注射の痛みがなく通院の負担も少なく、また、全身におよぶ副作用の発現率も低いという安全性から、注目されています。欧米では、「舌下免疫療法」がすでに保険診療として用いられており、その効果も確立されています。

花粉飛散の3か月前から専門外来で治療をスタート

この治療を実施している病院は限られていますが、当院では専門外来を設けて、現在30人以上の患者さんを治療しています。

留意点は、治療の開始時期と期間。花粉が飛散する少なくとも3か月前、11月頃までに開始することが望ましいです。始めたら数日で効果が出る治療ではなく、最低2年間続けて、医師と相談しながら、体質改善を目指します。

予防のための臨床試験を実施

私たちは、舌下免疫療法が治療だけではなく、予防にも有効と考え、2014年から臨床試験を行い、効果を確かめているところです。

スギ花粉症は体質も大きく影響しますので、ご家族が発症されている方で予防に関心のある方など、ぜひ、ご参加ください。

舌下免疫療法

①スギ花粉エキスを舌の裏に滴下
②2分間そのままにし、その後飲み込む

●**開始は11月頃までに：**花粉が飛散する3か月前、11月頃までに開始することが望ましい
●**自宅で毎日1回：**病院での投与は1回目だけ。その後は自宅で毎日１回投与。経過観察のために必要な通院頻度は、9月までは2週間に1回、9月からは月に1回
●**12歳以上から：**対象は日本では原則12歳以上
●**投与期間：**治療は最低約2年間

舌下免疫療法には予防効果も期待されています

スギ花粉症ではない人を対象に 臨床試験の参加者募集！

毎日1回自宅でスギ花粉舌下エキスを2分間口に含み、症状日記を記入。来院時に採血と皮膚テストを行います。

募集人員：150名
対 象 者：スギ花粉症を発症していない18歳～65歳未満の方
参加条件：約4回程度来院可能な方（2015年6月～翌年5月）
初回検診：6～10月の火曜・木曜（午後のみ）、土曜・日曜・祝日（午前・午後）
謝　　礼：試験後、お支払いします（来院時の交通費、駐車場料金は各自負担）

お問い合わせ先
耳鼻咽喉・頭頸部外科医局
（043-226-2581）

私のオタム

仏像の魅力に夢中！

奈良・中宮寺の伝如意輪観音は必見！

神経内科　医師
荒木信之

3歳の娘と二人旅で、昨年、東大寺、興福寺、室生寺などを楽しみました。お目当ては、私が中学時代からハマっている仏像です。娘は仏像より鹿に夢中。四天王に踏まれた邪鬼だけはおもしろがってくれました。怒りの形相で表現されることが多い四天王の中で、静かににらみを利かせる東大寺戒壇院の「広目天」（奈良）の迫力、お団子2つを頭につけたような姿でいながら、深い知性と品格にあふれる「伝如意輪観音（菩薩半跏像）」（奈良・中宮寺）などは必見です。

仏像を見ていると、千年もの間、戦火や逆境の中も「これは守り伝えねば」と先人たちを動かしてきただけの何かがある、と感じます。仏像鑑賞でリフレッシュしたあとは、仕事に集中。神経内科は一筋縄ではいかない疾患が多いので、ていねいな診察を心がけています。

働く現場日記

食事の面から治療をサポートしています

臨床栄養部　管理栄養士　平塚実紗

高校生のときに、毎日の食事が治療にもつながると知り、管理栄養士を目指す道へ進み、資格を取得。栄養面から、千葉大学病院の患者さんをサポートしています。

管理栄養士は、入院患者さんの栄養管理や食事の提供、外来患者さんの栄養相談などを、医師や看護師、薬剤師と連携しながら実施しています。患者さんとお会いする際は、一人ひとりの摂食の機能や病気の状態などに合わせたサポートができるよう、しっかりとコミュニケーションをとるよう心がけています。患者さんから「状態が良くなったよ」と声をかけていただくと、やりがいを感じます。

さまざまな患者さんの状態を理解するためには、病気や治療についての知識をさらに磨いていく必要があります。今後も勉強と経験を積んで、食事の面から治療につなげるお手伝いをしていきます。

あとがき

学会でシンガポールに出かけた。若者でごった返す繁華街。うだるような暑さの中、狭い階段にさしかかった所で大渋滞に遭遇。うんざりしながら登っていくと、渋滞の原因になっている老夫婦に出くわした。高齢者に優しくないこの街に憤りを覚えつつ、ふと夫婦のTシャツに目をやるとBrisk Walking Clubの文字が。（これでも）素早く歩いていますよ的なアピールに思わず笑みがこぼれた。改修工事でご不便をおかけしていますが、急ピッチで準備を進めておりますので、今しばらくご容赦ください。（副病院長　総合診療部　生坂政臣）

『いのはなハーモニー』41号　発行日　2015年4月17日
発 行　千葉大学医学部附属病院
〒260-8677 千葉県千葉市中央区亥鼻1-8-1
TEL　043-222-7171（代表）　http://www.ho.chiba-u.ac.jp/
※ホームページでバックナンバーがご覧いただけます